

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02157

研究課題名（和文）中山間農山村地域における福祉支援者の支援評価指標開発

研究課題名（英文）Development of support evaluation index for welfare supporters in rural areas

研究代表者

高木 健志（TAKAKI, TAKESHI）

佛教大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40413512

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中山間地域における住民の福祉課題を明らかにするために、福祉支援者の実践に着目して、検討することを試みた。中山間地域で福祉実践にかかわる支援者への聞き取り調査と文献調査を中心にすすめた。これらの研究調査活動を通して、中山間地域における福祉支援者が直面している課題には、「社会資源の乏しさ」とそれによって引き起こされる「福祉支援者が、一人で何役もこなさなければならない」状況に立たされていることが明らかとなった。そこで、一人で何役もこなさなければならない中山間地域の福祉支援者が活用できる、チェック項目を検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、中山間地域の福祉課題を、福祉支援者の実践から明らかにしていった。本研究では、住民の高齢化ばかりではなく、福祉支援者を支える制度的枠組みが整っていないことが課題であることを明らかにした。また農山村地域では、福祉的社会資源が乏しいがために、中山間地域の福祉支援者は、支援者自身が所持している福祉関連資格や職名にかかわらず、一人で何役もの役割を担わなければならないことを明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：In this study, in order to clarify the welfare issues of residents in rural areas, we focused on and examined the practices of welfare supporters. The research centered on interviews with supporters involved in welfare practices in rural areas and a literature review. Through these research and research activities, we have learned that the challenges faced by welfare supporters in hilly and mountainous areas include the "scarcity of social resources" and the resulting "welfare supporters having to perform multiple roles alone". It became clear that he was in a situation. Therefore, we were able to consider check items that can be used by welfare supporters in hilly and mountainous areas who have to handle multiple roles by themselves.

研究分野：社会福祉学

キーワード：農山村における福祉支援 農村ソーシャルワーク 質的分析 農村集落住民の生活課題

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は、中山間農山村地域における精神障がい者への支援実践について研究してきた(科研費 15K13089)。このなかで、障がい問題だけでなく中山間農山村地域が直面している介護や育児問題等福祉的課題が多々ある実状を目の当たりにした。そこで、中山間農山村地域における住民の生活実態と福祉的課題の現状を把握し、さらに農山村において活躍する社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員、保育士、行政職員担当者等の福祉支援者(以下、支援者)の支援の向上に役立つ評価指標を開発することが重要であると考えた。

そこで、本研究では、先の研究を発展させていく形で、中山間農山村地域における福祉的課題の実態を明らかにし、その実態への対応策として農山村で活躍する社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員、保育士、行政職員担当者等支援者のための評価指標の開発を行うこととした。

現代の農山村の生活構造は、住民の生活が農業や林業が中心であったときには、住と職とが同じであったが、今日、産業・経済状況の変化に伴って、旧来からの農村生活とその一方で現金収入を得るために働きに出るといふ、いわば都市的生活とが混在している。こうした生活構造の複合化という農山村の生活実態とそれによって派生する福祉的課題に、社会福祉制度がきちんと対応できているのかどうかは定かではない。また、そもそも、現代農山村における生活構造と福祉的課題の実態が明らかでないことから、これまで中山間農山村地域における福祉に関する議論は「フォーマルサービス資源が乏しい」とか「専門家の数が足りない」といった量的拡大を願う提言をする例がほとんどである。実際に中山間農山村地域であっても、障がいや子育て、貧困といった福祉的支援に携わる支援者が、どのように支援を行い、また構造化されているのか、といった重層的な課題が横たわる中山間農山村地域において支援者の支援の実態を明らかにした研究もまれである。また、人と人とのつながりが深いと言われている中山間農山村地域において支援を実践するにあたっては、支援者個人の経験や勘に頼るほかないという事態にあることから、その地域に馴染みの深い支援者と薄い支援者とで、支援にムラが出る可能性もある。

そこで、中山間農山村地域における福祉的課題の実態を明らかにした上で、支援に有用な評価指標の作成を行った。

2. 研究の目的

申請者は、中山間農山村地域における精神障がい者への支援実践について研究してきた。この過程のなかで、中山間農山村地域等においては、「精神障がい者への支援」だけに焦点を当てるだけでは十分な支援はできず、過疎地域が直面している少子高齢化に伴う介護問題、育児施設閉鎖に伴う育児問題、人口減少と社会構造の変化によるコミュニティの希薄化など、精神障がいの支援を行う上で解決すべき福祉的課題が多々ある実状を目の当たりにしてきた。そして、中山間地域、なかでも特に過疎の状況が深刻な農山村を取り上げて住民の生活実態と福祉的課題との実態について明らかにし、農山村で福祉実践をしている専門家の支援の向上に役立つ評価指標を開発することが重要であるという考えに至った。

これまで中山間地域、特に農山村に関する研究は、農村社会学を中心にして社会学や農学分野において展開されていた。一方で、これまで、社会福祉学領域においては、社会事業史といった歴史研究として位置づけられてきた。このため、中山間農山村地域、特に現代農山村の生活実状を明らかにしたソーシャルワークにおける研究は少なく、わずかにある程度である。そこで、現代農山村において高齢者問題は大きな課題であるが、それ以外にも障がいや子育ての困難さ、貧困などさまざまな福祉的課題の実態の解明とその解決軽減に関わる支援者のための指標開発に取り組むことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、期間中に、現代の農山村における生活課題の実態把握と住民が他世帯住民の支援をどのように行えるのか、そして、どの段階となれば、例えば集落住民にとって福祉的支援としては最も身近な存在である民生委員ら福祉支援にどのようにしてつないでいくのか、その目安となる評価指標開発を行う。具体的には、九州地方を中心に全国の農山村地域を対象にして、農山村住民が抱えている自らの生活課題や他世帯の支援経験を住民から聞き取る。また、当事者である住民が課題だとは認識していなくとも、周囲からみれば課題であることもある。

そこで、「当事者住民に課題としての認識がない」状況における「課題」を把握するために、住民に近い福祉的支援者の一つである民生委員に協力を得て「当事者住民は課題だとは認識していないものの、近隣から見た場合には課題があると認識できる状況」についての聞き取り調査を行う。聞き取った結果は、逐語録化を行いテキストデータに変換し、質的分析法を用いて

分析した。

中山間地域、特に農山村における住民の福祉的課題について明らかにしていくにあたって、人口減少問題・中山間地域についての社会学をはじめとした諸領域の研究動向の文献調査等を実施した。

中山間地域、特に農山村における住民の生活構造の実際を把握するために、参与観察を用いたフィールド調査を実施した。さらに、インタビュー調査の実施にあたっては、熊本県内の支援者から調査協力を得て実施することができた。インタビュー調査におけるインタビューガイドは、中山間地域、特に農山村に居住する住民が抱える福祉的課題には、どのような状況があるのかという現状への問い、中山間地域、特に農山村に居住する住民が抱える福祉的課題を、どのように支援して、解決・軽減を行ってきたのかという問い、中山間地域、特に農山村に居住する住民が抱える福祉的課題を支援していくにあたって、今後支援者にどのようなサポートが必要だと考えられるか、とした。なお、調査の実施にあたっては、事前に所属大学の研究倫理審査による承認を得た。

得られた研究成果は、論文としてまとめ公表した。

4. 研究成果

本研究は、次のような研究成果を生み出すことができた。

1) 農山村の住民生活と課題

現代の農山村の特徴をあげるとするならば、田畑や山林の面積が大きく占めており、地理的には「農山村」といえるが、住民の生活の構造に従事する産業という観点から見た場合には「住民生活の都市化」がうかがえる。これは、従来は、農業が主たる産業であれば、住むところと働くところが同じ生活圏であり、したがって生活そのものも「集落」を基盤とした生活であった。しかし、都市型の生活様式が農山村住民の主たる生活形態になってきているのではないかと仮定した場合、「住民の生活様式の都市化」は、農山村の生活に、どのような課題をもたらすのであろうか。

たとえば、農山村の住民も、スマートフォンを所持する。そうすると、次に、「都市の生活と同じスピードで情報にアクセスすることが可能」になる。景色はのどかな山々や田畑に囲まれた農山村が眼前に広がっていたとしても、農山村の住民にとってその景色に価値はほとんどなく、むしろ「都市の生活」と同じ程度の知識を持った生活となる。筆者が、農山村を主たる現場として実践するケアマネージャーとやり取りした際に、筆者が田舎はいいですね、と言ってしまった際に、「(情報へのアクセスのスピードが上がったことによって農山村の住民は)もはや何も知らない、ただのお人よしではない」と聞いた。もちろん、すべてのことを指すわけではないが、生活様式の都市化とそれともなう現代農山村の変化とがうかがえるフレーズとして筆者のところに強く残っている。

現代の農山村の実態は、どうやらイメージとは違って来るようである。従来は、農業が主たる産業であれば、住むところと働くところが同じ生活圏であり、生活そのものも「集落」を基盤とした生活であった。しかし、集落外の会社に働きに出る、という労働形態であったり、夫婦共働き、という都市型の生活様式が農山村住民の主たる生活形態になってきているのではなかと予測される。

統計データから考えると、現代農山村の住民のうち、50歳代以下の世帯ではこのいわば都市型の家族形態が主たるものとなっているのではないだろうかと考えられた。また、農山村で生まれ育ったもののうち、進学などを契機に他地域へ転出して、その転出先で世帯を構える、いわば他出子も多くいるのではないだろうか。また、地域移住やいわゆる「定年後にふるさとにUターンする」などの人口の還流についても農山村の福祉課題を検討していく上では注視する必要があることを明らかにした。

2) 農山村の新しい状況下における生活と福祉的支援について

住民の数が減少している現代農山村において、さらに、その若い住民の多くは在宅勤務や家庭内で過ごさざるを得ないという閉鎖的な生活空間のなかで、「線を引く」ということが身を守る方法の一つであることを農山村の住民にも啓発していく必要がある。

農業は、朝から晩まで、田畑での仕事となる。そうすると、介護を要する家族が同居していた場合には、日中、一人にはできないことから、その介護を要する家族が過ごす場を探さねばならなくなる。そうすると、農山村にある高齢者介護施設は、多くの利用者が入・通所することとなる。他方、農山村部の高齢者施設で介護に従事する人々は、感染に細心の注意を払いながら、仕事をしなければならない。プライベートの時間も、感染予防の観点から、在宅で過ごさざるを得ない。農山村の高齢者介護施設でクラスター感染が発生したならば、対応できる医療機関には限りがあることも考慮しなければならない。そうすると、農山村の高齢者介護施設で介護に従事する人々の疲弊を食い止めなければならない。今後も、社会が予期せぬ事態に見

舞われたときに、どのようにして人々の暮らしを守ることができるのか検討する必要があるということにこの点については結論に至った。

3) 福祉支援者への調査結果から

調査協力を得られた福祉支援者からインタビュー調査を行った。その調査から、農山村の住民が抱える福祉課題に対する支援について、福祉支援者はどのようなことを課題と考えているのか、ということについて、次の3点のカテゴリーとして結果を明らかにすることができた。

(1) 必要な支援がスムーズに届けられない

このカテゴリーは、〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕、〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕、〔制度が知られていない現実〕、〔福祉サービスが拒まれる〕、〔自己責任意識〕、〔サービス利用に対する近隣からの視線〕という6コードから生成された。〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕は、福祉サービスを利活用していることを、近隣住民に知られないようにという求めが、福祉支援者に来ることであった。〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕は、世帯のなかに認知症に起因する介護に関する福祉的課題が生じた際に、介護サービスといった福祉制度のサービス事業を利活用しているにもかかわらず、それを近隣住民に知られないようにという求めが、福祉支援者に来ることであった。〔制度が知られていない現実〕は、介護保険や介護保険のサービスについて、それを最も必要とされる状況にある住民が知らない、という状態のことであった。〔福祉サービスが拒まれる〕は、サービスの活用を促しても、拒否されることを懸念される状況のことであった。〔自己責任意識〕は、自分たち家族のなかのことは、自分たちの力で何とか対応しなければならないという、自己責任の意識がある状況のことであった。〔サービス利用に対する近隣からの視線〕は、福祉サービスの利活用に対して、近隣住民らから批判的な視線や関心が寄せられる状況のことであった。

(2) 多様な課題を抱えた世帯への対応

このカテゴリーは、〔「介護帰郷世帯」への対応〕、〔「高齢の親と障がいの子世帯」への対応〕、〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕、〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕の4コードから生成された。〔「介護帰郷世帯」への対応〕とは、農山村で生まれ育ち、いったん、都市部等へ進学や就職を機に他出していったものの、老齢の親の介護のために帰郷してくるリターン介護によって再構成された世帯へ対応することであった。〔「高齢の親と障がいの子世帯」への対応〕とは、高齢の親と障害をもつ子との同居という世帯員で構成された世帯へ対応することであった。〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕とは、まだ介護を要するわけではないが高齢の親の元で、障害などのない子が他出後に帰郷し、さらにその中年の子はとくに仕事をするわけでもなく無業の状態でも同居している世帯へ対応することであった。〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕とは、多世代で同居はしてはいるものの、おりあいが悪いことで、支援を要する者の日常生活が難しい世帯へ対応することであった。

(3) 仕方がないがやるしかない

このカテゴリーは、〔境界線の引きにくさ〕、〔いくつもの役割を担う〕の2コードから生成された。〔境界線が引きにくさ〕は、福祉支援者が利用者宅を訪問した際に、本来業務ではない相談がされるものの、本来の業務ではないと断ることができないことであった。〔いくつもの役割を担う〕とは、利用者への支援として訪問するも、本人への支援に加えて、世帯員に対するサポートを行わざるを得なくなり、一人の福祉支援者が、本来の役割以外にも状況に応じて、さらに本来の役割以外の役割も併せて担うことであった。

(4) 距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題

このカテゴリーは、〔距離が遠いという課題〕、〔中心部と同一地区扱いで加算が取れない〕の2コードから生成された。〔距離が遠いという課題〕は、事業所のある中心部からの距離を理由に、訪問する福祉サービス事業者がないことであった。〔中心部と同一地区扱いで加算が取れない〕とは、実際には農村部であるにもかかわらず、市町村合併によって、行政の地区単位としては、中心部と同じ地区として扱われるため、たとえ中心部から遠く離れた農山村部であったとしても加算がつかないことであった。

農山村の福祉課題については、人口減少や住民の高齢化といったことに矮小化されて議論されているようにも思える。今後も継続して社会や世間が「見えているのに、見ていない」農山村の生活課題とその解決について調査研究を行っていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 高木健志	4. 巻 第45号
2. 論文標題 農山村における福祉的課題に対する相談支援の困難と課題 - 福祉支援者へのインタビュー調査を通して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク学会誌	6. 最初と最後の頁 1,11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木健志	4. 巻 18
2. 論文標題 ソーシャルワーク実践における関係性と視座に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佛教大学 社会福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 173-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木健志	4. 巻 17
2. 論文標題 農山村における住民生活の構造と福祉的課題とに関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佛教大学 社会福祉学部論集	6. 最初と最後の頁 131.139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木健志	4. 巻 Vol.22 No.3
2. 論文標題 中山間農山村地域における福祉支援者の支援評価指標開発に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「地域ケアリング」 2020年3月号	6. 最初と最後の頁 82・84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木健志	4. 巻 31
2. 論文標題 中山間農山村地域における福祉支援者による訪問型支援の実践評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口老年総合研究所「年報31」	6. 最初と最後の頁 9・18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木健志	4. 巻 25
2. 論文標題 農山村における福祉的支援の課題に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山口県立大学社会福祉学部・『山口県立大学社会福祉学部紀要』	6. 最初と最後の頁 11.23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高木健志
2. 発表標題 現代農山村における福祉的課題の現状と課題
3. 学会等名 京阪非行研第29回例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------